



東海散士『佳人之奇遇』論：「亡国ノ遺臣」について

李, 信明

(Citation)

国文学研究ノート, 29:17-32

(Issue Date)

1995-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012302>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012302>



東海散士『佳人之奇遇』論

——「亡国ノ遺臣」について——

李 信 明

はじめに

『佳人之奇遇』（明治十八、二十年）において東海散士——作者でもあり、作中主人公でもある——の言う「亡国ノ遺臣」とはなにか。散士は、幽蘭・紅蓮そして范聊といった登場人物たちの苦難にみちた経歴談を聞き終えて、「散士モ亦亡国ノ遺臣彈雨砲煙ノ間ニ起臥シ生ヲ狐城重圍ノ中ニ偷ミ国破レ家壊レ窮厄萬状辛酸ヲ嘗メ盡ス何ソ令嬢等ニ讓ランヤ」（巻二）と切りだす。そして「亡国ノ遺臣」という言葉は互いの同質性を端的にあらわすものとして彼らに共有されている。このことは、紅蓮が満梨という人物に語りかけて、「初メ四人ト此ノ地ニ邂逅スルヤ皆亡国ノ遺臣ナリ互ニ其奇遇ニ感シ米歴ヲ語り肝膽ヲ吐露シ以テ断金ノ交リヲ誓ヘリ今ニシテ亦亡国ノ忠臣一人ヲ加フ豈奇遇ニ非スヤ」（巻八）と述べていることでも裏付けられよう。中村光夫「作品解説」は、『佳人之奇遇』のこのような側面をとらえて、「この小説に登場する主要な人物はみな亡国の民といつてよい人々です。彼等を育み、彼等の愛した国々あ

るひは制度はすでに現存の秩序によつて滅亡の運命に逢つてゐるので、この意味で彼等はみな現存の秩序に反対する革命家です」と評する。これは、おそらく「亡国ノ遺臣」の意味するところのおよそを分かりやすく説明していると言えよう。しかしながら、作品の細部で言えば、疑問があるように思われる。つまり、「亡国の民といつてよい人々」とはいつても、作者散士や登場人物たちが考えているほど、彼らがそう単純にくくられるかどうか。散士と朝鮮の亡命客金玉均との面会場面（巻十）——この場面は現実にあつたと推測される——には、この問題に關する興味深いエピソードが含まれている。初対面の散士が例のごとく「僕モ亦亡国敗残ノ餘ナリ（略）西遊シテ西球亡国ノ義士節女ニ邂逅シ其奇遇ニ感激シテ備ニ心膽ヲ吐露セリ」云々と切り出す。すると、「居士聞キ終ラス急ニ驚キ起テ呼テ曰ク僕ヲシテ奇遇中ノ人タラシムルモ郷国ヲシテ亡国タラシムル勿レ」と、金玉均は散士に答えるのである。たしかに、甲申政変（明治十七年）の失敗により金玉均らが日本へ亡命してきたものの、朝鮮はまだ亡びてない。また、散士にしても会津藩の敗

亡はあったものの、日本そのものが滅んだわけではない。したがって散士の言葉を、何らかの媒介物なしに、文字通り受けとることはできない。金玉均の理屈をもってすれば、「亡国ノ遺臣」は、「明ノ遺臣」として生きる范卿やアイルランドの回復を志す紅蓮などに限られてくる。さらに疑問に思うのは、彼らが「現存の秩序に反対する革命家」だとする括り方である。つまり、他の登場人物たちがそれぞれの現体制の転覆をはかっているからといって、単純に散士もまた同じくその中に位置づけられるかどうか、という疑問である。なぜなら、散士が明治政府を倒して新しい国家体制を作ろうとしているとはとても考えられないからである。いずれにせよ、このような立場の違いという壁にも係わらず、散士が「亡国ノ遺臣」という合言葉を使うことで、その壁をただちに乗り越えて他の「義士節女」たちと互いに心を通いあわせることに成功していることは確かである。そこで「亡国ノ遺臣」という言葉のもとに彼らと呼び集めるものは何か、すなわち、何をもって「亡国ノ遺臣」と言うのか、という問いになる。ここでは、散士にとつて「亡国ノ遺臣」とは何かについて、その原点到ち帰って考えてみることにする。それは、言い換えれば「亡国ノ遺臣」という言葉に、散士のどのような思いが秘められているかを探ることである。その秘められた思いをたどってゆけば、あるいは「亡国ノ遺臣」として散士の示す人間像を理解する一つの手掛かりとなるかも知れない。

二 原体験としての会津戊辰戦争

東海散士・柴四朗は、嘉永五年（一八五二）会津藩士佐多藏（二八〇石、馬術・砲術師範）の四男として生まれ、満十四才のとき王政復古を迎えた。明治維新の幕開けを彼はその舞台となった京都でつぶさに目撃していたと推測される。歴史の大きな曲がり角にたつてこの十四才の少年ほどのような思いで事態の推移を見つめていたのだろうか。それはおそらく、島崎藤村『夜明け前』（「中央公論」昭和四十年）の主人公半蔵の感想とはかなりかけ離れたものであったに違いない。藤村は半蔵の喜びのようすを次のように描いている。

冬の日茶屋の内にも外にも満ちて来た。食後に半蔵等は茶屋の前にある翁塚のあたりを歩き廻つた。踏みしめる草鞋の先は雪溶けの道に燃えて、歩き廻れば歩き廻るほど新しい喜びが湧いた。一切の変革はむしろ今後にあらうけれど、兎も角も今一度、神武の創造へ——遠い古代の出发点へ——その建て直しの日がやつて来たことを考へたばかりでも、半蔵等の眼の前には、何となく雄大な氣象が浮かんだ。

有頂天になることなく、踏み出す一歩一歩に喜びを噛みしめてゆく穏やかな情景、それがかえつて「古代」への夢に期待をふくらませている半蔵の、喜びにときめく心を見事に写しだしている。もちろん『夜明け前』のその後の展開は、半蔵の夢のやぶれてゆく姿を描くことになる。それはともかく散士は、王政

復古を半蔵のごとく素直に喜ぶ場合ではなかった。そのうえ、散士個人の考えは別にあるとしても、彼をとりまく会津藩の意見は王政復古に否定的であつたように思われる。散士にとつて王政復古とは、追うほうから追われる側へ、という立場の逆転を意味し、やがて飛び散る血の匂を予感させるものであつたと想像される。追われる会津藩の立場を散士はこう述べる。

慶喜公英才ヲ以テ大ニ為ス所アラント欲ス然レモ病膏膏
ニ入り復タ之ヲ如何トモスル能ハス遂ニ大政ヲ奉還セラレ
繼テ我公亦職ヲ失ヒ京師ヲ退クニ至ル而シテ当時世人却テ
我ヲ責ムルニ覇府ヲ保庇シ維新ノ帝業ヲ妨クルモノトナシ
朝廷我ヲ罪スルニ禍心ヲ包蔵シテ帝命ニ抗スルモノトナシ

哀願途絶エ愁訴計究リ錦旗東征大軍我境ヲ圧ス(卷二)

そして散士の見た「錦旗東征大軍」の正体は「此レ一二雄藩ノ陽ニ幼主ヲ擁シテ陰ニ私怨ヲ報スルノミ」のものでしかなかつた。こうした認識は、ひとり追われる側のみならず、追う側の一部にもあつたようである。いづれにせよ、散士が大政奉還や王政復古の必然性を認めたとしても、その後の戊辰戦争に至る、筋のとおらない一連の政治過程を戦争敗北の結果としてすべてそのまま承認せざるを得なかつたことは、いつまでも彼の心を傷め続けたであらう。

かれの心をもつとも痛ませたのは、戦争がもたらした散士一家の凄惨な死に別れという事件においてであつたように思われる。そのときのことを、散士は「涙ヲ飲ミ更ニ語ラント欲シテ語ル能ハサルモノ数回胸結ヒ心塞ル稍クニシテ涙ヲ攪シ」なが

ら、やつと語り出す。

暁雨濛濛日色光ナク砲声轟轟叫声天ニ震フ散士時ニ尚ホ
幼ナリ猶ホ一矢ヲ敵ニ放テ死セント欲シ跪テ家人ニ訣別シ
覚エス顔色凄愴タリ慈母叱テ曰ク汝幼ナリト雖モ武門ノ子
ナリ能ク一敵將ヲ斬リテ潔ク尸ヲ戰場ニ暴シ家声ヲ損スル
勿レト散士奮テ蹶起ス家人送テ門ニ至ル祖母呼テ曰ク汝
ヲ泉下ニ待タント姉妹呼テ曰ク努力セヨト涙ヲ掩フ嗚乎痛
哉百年ノ恩情永訣言茲ニ盡矣家人神前ニ聚リ香ヲ焼キ祖先
ノ靈ニ告ケテ曰ク(略)潔ク国家ニ殉シ死シテ(略)以テ
三百年來養生セシ士風ヲ表明スル真ニ此時ニ存ス(略)火
ヲ放テ從容義ニ就ケリ(卷二)

十四・五才の男の子を「幼」と言えるかどうか判断に迷うところであるし、散士の病状のほども察しかねる。が、理由は何であれ、出戦のまぎわになって、「覚エス顔色凄愴タリ」では、武士の子としての面目にかかわるものであり、母親からの叱咤も当然であつた。だがそれがかえつて、戦争の渦の中へ否応なしに連れこまれてゆく、弱々しい一少年の哀れむべき姿を浮き彫りにしている。引用に続いて散士は、深く死んでいった人々の事例を紹介している。その一つの「白虎隊」に散士も編入されるはずであつたが、勉強および病気のため入隊免除となり、この日一人で城にむかつて出発、籠城組に加わつたようであるが、さだかではない。いづれにせよ、「一矢ヲ敵ニ放テ死セント欲シ」て、散士がかけていったことは確かであらう。ところが、彼は死ななかつた。彼ばかりでない。退避させられてい

た弟はもとより、激戦に参加した父と三人の兄のうち仲兄をのぞけば生き残ったのである。散士の一家の中で潔く死を選んだのは、祖母をはじめ妹にいたる女性たちであった。「大丈夫ヲ馬革ニ裹ムハ伏波ノ壮語亦壯士の常ノミ（略）唯酸鼻心ヲ刺シ目見ルニ忍ヒス耳聞クニ堪ヘサルモノハ婦女ノ操烈国家ト共ニ亡フル者挙ケテ数フ可カラサルナリ」（巻二）と散士は語る。が、散士一家にかぎって言えば、それは、皮肉とも言えない、あまりにも残酷な現実を一少年に見せつけたのである。散士一家の惨劇は悲しい出来事であったし、否応なしにそのことを見せつけられた少年はもつとも同情されるべきかも知れない。しかし、こうした悲劇性だけで『佳人之奇遇』が成り立っているのではない。一少年は、残酷な現実を見せつけられたと同時に、「三百年來養生セシ士風ヲ表明」しようとして「潔ク国家ニ殉」じて死んでいった人々によって、その「士風」の重みと「武門」の厳しさがどのようなものかを感じ知らされたのであった。そして、残酷な現実の中から「国家ト共ニ亡フル者」の真の姿を認めるとき、彼は、哀れむべき一少年から「亡国ノ遺臣」東海散士へと生まれかわっていったのではあるまいか。

戊辰戦争の体験は、病弱で頼りない少年散士を精神的に強く鍛えあげるきっかけになったようである。このことを、散士の弟柴五郎の回想（『ある明治人の記録』）に基づいてたどって見てみることにする。つぎの引用は、終戦直後、謹慎所（いわゆる捕虜収容所）にいた散士が、叔父の家に預けられていた弟を訪ねてきたときのエピソードである。百姓同然に化した弟の姿

を見て、散士は「驚きかつ怒りて右手の拳を畳につきて」叔父をげしく責めたてて言う。

叔父上、失礼ながらこの様は何事なりや。弟五郎、姿は百姓なれど柴家の息子なり。大小を棄て髪を斬りても、武家の子たること変らず。いかなるご所存なりや。（略）母上御臨終にさいし、叔父上に五郎の行末を託せりと聞けり。されど百姓にせよとの御遺言とは思われず。（略）自ら好みて身を落す要なし、父上にたいし何と御報告致すべきや。

そして、散士は弟の前途について長兄と相談している。このような散士の姿には、かつて出戦の際「覚エス顔色凄愴」となった少年の面影はもはや見あたらない。ところで、この叔父についていえば、敗戦によって「翁生來の氣骨挫けて、日夜世を儂み、武士道すでに失われたり、神仏また頼むにたらずと嘆き悲しむ。あるときは東北列藩の不甲斐なきを責め、あるときはまた薩長土肥下級武士の暴挙に怒れども、あすすでに事終われりと嘆息」するだけで日々を送る老人であったようである。すると、確かに「敗戦のショックで氣力のくじけた七十才の大叔父清助に対し、茂四郎の言葉は酷」であったかも知れない。しかしながら、「武家」のありかたを問いただし、甲斐がいしく立ち振る舞う散士の姿は、年老いた叔父とはいかにも対照的であり、生きいきと輝いて見える。こうした散士の姿をどのようにに理解すべきだろうか。年老いた叔父が亡びた会津藩とともに葬り去られてゆく存在であるのに引き替え、散士は、その廢墟のなかにあって、藩とともに亡んでいった人々の遺志によって支

えられ励まされ、さらなる成長を遂げる存在であるように思われる。

戊辰戦争中の体験が散士の生涯における原体験をなすものであったとすれば、その中身となるものは、「士風」の重みと「武門」の厳しさを思い知らされる出来事に遭遇し、「国家ト共ニ亡フル者」として生きるこの意味を体得したことであろう。「亡国ノ遺臣」とはこの「国家ト共ニ亡フル者」に他ならないが、それは、理屈なしでまさに国と共に亡ぶことである。しかし、だからといって、それが会津藩とともに葬り去られる性格のものでないことは明らかである。散士の「亡国ノ遺臣」は、むしろその廢墟の中にあつて生きようとする積極的な意志表明であつた。つまり、戊辰戦争が散士の所属する会津藩にとつて理不尽であつたと思えば思うほど、また戦争の相手に対する怨念が深まれば深まるほど、彼は、藩とともに亡びていった者たちの魂の呼びかけに絶えず励まされ、「国家（＝日本国）ト共ニ亡フル者」として自己規定をかためていったと考えられる。どうしてそのようなことが可能になるのか。それはおそらく忠誠関係の再確認によるものと思われるが、このことについては次章で考えてみることにする。

三 忠誠の転位

女性といえども「国家ニ殉」じて「士風」を表そうとするほどの国柄であるから、会津落城の状況はどうぞん注目されよう。

全員玉碎とまではいかなかったとしても、散士をふくむ籠城組が力のつきるまで奮戦したことは事実である。しかし、いざ降伏となると、そこにはなかなか難しいものがあつたに違いない。散士は降伏に至るまでの経緯を次のように語る。

孤軍重圍ノ中ニ陥リ硝煙空ヲ覆ウテ日光ノ風雪膚ヲ刺シテ糧饑已ニ盡キ士卒日ニ傷亡シテ外ニ援兵ナク弧城ヲ以テ天下ノ大軍ニ抗スル三旬遂ニ降旗ヲ建ツ（略）士卒モ憤恚自殺スルモノアリ主將論シテ曰ク空シク死シテ名ヲ滅セシヨリ恥ヲ忍ヒ生ヲ全シテ一旦外患アルノ日誓テ神州ノ為メニ生命ヲ鋒鏑ニ委シ而シテ是非正邪ヲ死後ニ定メンハ若カスト是に於テ一藩恨ヲ忍ヒ涙ヲ吞ミ轅門ニ降ル（卷二）

「三百年來養成セシ士風」からみて、この「主將」の説諭はどのように判断されるべきだろうか。聞きようによつては、それは、生きてゆくための体のいい言い分とも考えられよう。しかし、理不尽な戦争であつたにもかかわらず、その説諭が籠城組をそれなりに納得させたのは、説諭の論理のなかに含まれた忠誠関係の見直しによるものであつたように察せられる。「神州」という忠誠対象に目をむけることは、「一二雄藩」に対する恨みと降伏による武士としての恥を忍ぶに足りるものとして説かれてゐる。しかしながら、急に「神州」と言われても、忠誠関係は成り立たないはずである。しかも歴史上では、会津藩は、官軍すなわち政府軍と戦つた賊軍すなわち反乱軍扱いをされてゐるのである。したがつて、その会津藩の武士が降伏の際いっせいに、生きて「神州」のためにつくすことを誓うのでは、な

にか筋違いであるかのようにも思える。この辺の事情を、会津藩降伏の直後、奥平謙輔（長州干城隊の参謀）と秋月悌次郎（会津藩軍事奉行添役）とのあいだに交わされた手紙のやりとり（『会津戊辰戦争史』）を参考にうかがってみることにする。まず、奥平より秋月への慰問状（戊辰九月二十四日付け）に曰く、

不相見八九年（略）夫貴國為旧幕府亦至矣 無貴國則徳川氏之鬼其不餒 臣各為其主職也（略）所願者聖天子若以楚莊之心 封之故國使撫其臣民 他日辺海有警 被堅執銳為士卒先 以所以其報徳川氏者 致之朝廷以表其自新之心 亦一事也 足下其思之¹¹

と。ようするに、臣はおのおのその主のためつくすのであり、会津藩は幕府のためつくし、その職をまっとうした。できれば、幕府につくしたように、今度は朝廷につくしてほしい、というのが奥平からの慰問状の要旨である。これに対する秋月の返書（戊辰十月六日付け）は、「被賜客月念四日之書 薰誦数次 且懼且愧 僕亡国之遺孽 譴劣無似 将何辞以答¹²」としながらも、あえて陳弁することがあると断つて、つぎのように述べ

其老寡君之素志固在天朝 不独為故幕府也（略）尊王室乃所以恭順幕府 恭順幕府亦所以尊王室也 弊邑雖至親 豈独阿私徳川氏哉 夫一徳川氏也 貴藩幕府視之 弊邑宗家視之 故情義之所係 不無厚薄小異同 此亦自然之勢也（略）夫視孺子之将入井 奔競救之者 人之情也 況宗家

之危急 豈忍座視¹³

秋月は、奥平からの慰問状を「厚論」として感謝しつつも、それをすなおに受け入れることができなかった。奥平としては会津藩の「節義」を高く評価したつもりであろうが、秋月からしてみれば、それは、戦争の罪をみずから認めかねないものであったのである。もちろん、そのためだけではないだろうが、秋月がくりかえして説くところは、「素志」はもともと「天朝」にあつて、もっぱら「幕府」のために会津藩が働いていたわけではない、ということである。想像のかぎりではないが、秋月はおそらく次のように言いたかったのであろう。すなわち、会津藩はもっぱら幕府のためにだけ働き朝廷に背いて朝敵になったようにいわれているが、それは誤解なのだ。会津藩は、はじめから「尊王室」であつたのに、「一二雄藩つまり薩長が私怨を報いようとしたがため戦争となり、「宗家」の危急を見かねてこれを助けたまでである。結局、会津藩は、朝廷に背いてもいなければ、官軍と戦つてもいない。あくまで「尊王室」であり、「一二雄藩」との私闘があつただけなので、朝敵よばわりはもつてのほかだ、と。このことは、秋月のみならず、『佳人之奇遇』において散士の言いたかつたことでもあつたのではあるまいか。もし以上のように散士をふくむ会津藩にとつての戊辰戦争を理解して差しつかえないとしたら、ここには幕末維新期における忠誠関係の動向¹⁴に関して示唆するものがありそうに思われる。図式化の弊をおそれずに言えば、それは、長州藩の奥平の忠誠が「朝廷」一本立てであるのに対して、会津藩の秋月のばあい

「幕府」と「朝廷」の二本立てで忠誠関係が成り立っている、ということである。忠誠関係から見た戊辰戦争は、薩長を中核とする尊皇派と会津藩を先頭とする尊皇恭慕派とがそれぞれの名分を楯にくりひろげた戦であったと考えられる。戦の結果、尊皇恭慕派はその名分を失い反逆者となったが、この戦争もたらしたもつとも重要なものは、従来の幕藩体制における重層的な忠誠関係のしがらみから勝者はもとより敗者をもすくいあげ、朝廷のみへの忠誠の単一化にこぎ着けたことであろう。とはいっても、幕末維新期の忠誠関係の実体はより複雑であったことも確かであろう。

いづれにせよ、このように考えた場合、「餘生ヲ保チ速遣竄斥猶ホ悔イサル所以ノモノハ他日我帝國ノ為メニ鞠躬命ヲ致シ往年ノ志ヲ天下後世ニ伸ヘ死者ニ泉下ニ謝セント欲スルノミ」(巻二)という散士の発言は、単なる弁解ではなく、「往年ノ志」すなわち忠誠の再確認を行ったものであったと理解される。散士からすれば、戦争に負けたことは認めるとしても、「勝てば官軍」という論理はどうてい承服できるものではなかった。「我こそが……」という思いが「帝国」へのいっそう積極的な忠誠関係を認識させ、「亡国ノ遺臣」としての東海散士を作りあげていったものであったと考えられる。

その一連のプロセスを確認するうえで貴重な資料がある。西南戦争の前年、不穏な空気の漂っていた時期に「東京日日新聞」(明治九年十一月六日)に公開された散士の手紙がそれである。

東奥ノ寒士柴四朗謹テ書ヲ旧会津藩士諸君ニ呈ス(略)

我輩ノ義務タルヤ上政府ノ政令ヲ守リ下人民ノ安寧ヲ謀リテ共ニ康福ヲ受クルニアリ故ニ仮令政府ガ其ノ権限ヲ越エ人民ノ權利自由ヲ剝奪シ賦歛課税ヲ重クシ残虐至ラザル所ナキノ日ニ逢フモ席旗竹槍ノ暴挙ヲナスハ甚ダ不可ナリ然ルヲ況ンヤ正明無私ナル明治政府ノ下ニ保護セラレナガラ大義名分ノ在ル所ヲ忘レテ賊徒ニ與ミシ万一ノ私利ヲ僥倖スルニ於テオヤ(略)一朝方向ヲ誤テ賊名ヲ蒙リ壯士ハ多ク干戈ニ死シ(略)而シテ幸ニ餘息ヲ存シ耻ヲ忍テ今日ニ生息スル所以ノモノハ異日國家警アルノ時ニ際シ堅ヲ蒙リ銳ヲ取テ力ヲ王室ニ盡シ復テ忒心ナキヲ天下ニ表シ以テ前日ノ汚名ヲ雪ガント欲スルニ外ナラズ想フニ諸君ノ志モ亦タ当ニ然ルベキ也然ルニ何ンゾ科ラン頃日聞ク所ニ抛レバ田同藩人(長岡等)(略)遙ニ前原ノ声援ヲ成ント企テ事未ダ成ラズシテ縛ニ就ケリト嗟々是レ何ノ心ゾヤ我輩昔テ之ヲ聞ク大義ノ臨ム所ハ草木モ尚萎靡スト況ンヤ逆賊ニ於テヤ田同藩諸君ヨ決シテ不平士族ニ煽動セラレテ再び方向ヲ誤リ天下ノ嗤笑ヲ受ルヲ勿レ幸ニ大義名分ノ在ル所ヲ確認シテ國家ニ尽ス所アレ四朗敬白

ようするに、不平士族に煽動されるな、というのがこの手紙の要旨である。が、「席旗竹槍」に対する嫌悪感にはげしく、あまり民権論的な思想の持ち主でないことは一目でわかる。ところで、「正明無私ナル明治政府」とはいかにも皮肉な言い方のように聞こえるが、散士にとってそれは厭味でも何でもなかったように思われる。また「一朝方向ヲ誤テ賊名ヲ蒙リ」といえ

ば、戊辰戦争の罪をみずから認めているようにも読み取れるが、それでいいのか、まぎらわしい。このような内容の手紙が書かれるようになった直接のきっかけは、おそらく永岡久茂など旧会津藩士が中心となって起こした思案橋事件にあってと思われる。この反乱未遂事件において永岡らの動機と目的はさだかでないが、前原一誠の萩の乱と互応するつもりであったことは確かかなようである。ちなみに、思案橋事件の永岡は、戊辰戦争の最後をかざった、榎本武揚の五稜郭の戦いにも参加した人物である。また、萩の乱の首謀者の一人には、前に取りあげた奥平謙輔が入っていた。こうなつては順逆の混乱は避けがたく、いよいよその激しさを増してきた感がある。が、当時としては、それはさほどめずらしい組合せでもなかったであろう。珍しいと言えば、明治になって政府に対する会津藩士の不満が思案橋事件において唯一、反乱の形であらわれたことである。散士にしても、たとえ「正明無私ナル明治政府」とはいつていても、これとほぼ同じ時期に書かれた他の文章を考慮すれば、明治政府の政策に無条件で賛同していたとは言えない。おそらく散士にも不満はあつたはずである。そして「明治政府」の実体が薩長政府にすぎないと認識すればするほど政府に対する敵愾心は燃えあがるであろう。思案橋事件はその延長線上に位置すると考えられる。しかしながら、散士はそのようには認識していないようである。すなわち、散士にとつて明治政府はあくまで「正明無私」なものとして捉えられている。このことは、「正明無私」であるべき明治政府をすでに「正明無私」であるもの

とする散士の認識構造を物語つていよう。思案橋事件の永岡らにもおそらくかくあるべき明治政府、すなわち觀念化抽象化された「明治政府」の姿が彼らの意識のどこかにあつたと推測される。この觀念上の「明治政府」は、天皇を頂点とする政府すなわち天皇政府の異名にほかならない。おなじ明治政府でも薩長政府と天皇政府では、それぞれに対する人々の行動様式も必ずと異なつてくるであろう。その理想と現実の相剋のなかに永岡らを反乱へと駆りたててゆく強い動機がひそんでいると考えられる。それに反して、散士が明治政府を名実ともに「正明無私なる明治政府」つまりは天皇政府と認識することは、その忠誠関係によつて、彼の行動がよかれあしかれその政府の意志に従うものとならざるを得ないことを意味する。このような認識から反政府運動としての反逆や革命の論理を期待することは無理であろう。すると、散士が「勝てば官軍」の論理に屈伏したかに見えるが、そうは限らないように思われる。つまり、負けて賊となつた会津藩士の（我こそが……）という情念は、つぎのような行動様式で具体的に類型化されよう。一つは、沈黙の時を過ごす秋月悌次郎のような類。一つは、反乱にはしる永岡らのような類。一つは、以前にましてより積極的な忠誠関係を築きあげる類、散士のばあいこれに当たると思われる。以前より積極的になつたとしても、散士の忠誠関係は、特定の官僚や政治家との間で結ばれるのではなく、天皇に象徴される政府や国家という觀念との間において取りつけられたものであろう。さらに、この忠誠関係が成り立つためには、戦争の敵であつた

「一二雄藩」と戦後の「明治政府」とは切り離されて、戦争の怨念が「明治政府」には及ばないように、意識せずとも、操作されていると推測される。そしてこのような散士であったから、「一朝方向ヲ誤テ」「貳心」であると誤解されることを二度と繰り返してはならない、という憂慮が強迫観念となつてこの手紙の文面に現れたものである。つまり、散士の書簡は、明治九年の不穏な状況にあつて、忠誠関係の再確認を会津藩士たちに促すものであつたと理解される。天皇の意志に従うという「大義名分」からすると、戊辰戦争における会津藩の非は明らかである。すなわち、戊辰戦争での天皇の意志「方向」が討幕にあつたとすれば、理由は何であれ、それにしたがわなかつた会津藩の罪は逃れようもない。たしかに散士の手紙に論理的な整合性はある。ところがそうになると、戊辰戦争で死んでいった者たちはうかばれなくなる。いくら名分があつたとしても「大義名分」ではなく、その「大義名分」に背いた戦争のため彼らは死んでゆき、「朝敵」の名は避けられないのである。しかし、あくまで忠誠であろうとする、ひたすら「貳心」のないことを証明しようとする、この時の散士にはもはやそのことを顧みる余裕はなかつたようである。戊辰戦争が会津藩にとつて「大義名分」のない戦争であつたにしろ、戦争における会津藩のすべてを否定しざるものでないことも確かであろう。会津藩なる「国家ト共ニ亡フル者」は、忠誠関係の再確認を通じて「国家（＝日本帝国）ト共ニ亡フル者」へと転位継承され、やがて『佳人之奇遇』の「亡国ノ遺臣」東海散士として姿をあら

わすのであると考えられる。

四 敗者のゆくえ

国家に対する忠義一筋で生きようとする「亡国ノ遺臣」東海散士像がいよいよくつきりと浮かんできたようである。が、そこに至るまでにはもう一つ見ておかなければならないものがありそうである。それは、明治という新時代を敗者として迎えることとなつた散士がその運命をどのように受けとめていったのか、あるいは乗りこえていったのか、ということに他ならない。このことについて、戊辰戦争の終了直後から明治十年の西南戦争に至るまでのあいだ、散士が直面せざるをえなかつた現実のさまざまな様子を追いながら見てゆくことにする。

戦後間もない時期、敗戦の衝撃からまだ抜けられない会津藩士たちに止めを刺すかのように世直し一揆の波が旧会津藩領におしよせてきた。その一つ、猪苗代周辺の打ちこわしは、十月十九日から四日間昼夜を問わず郷頭や肝煎り宅をおそつて行われた。そして一揆の群は打ちこわしや焼払いのすえ、猪苗代城の本丸に入り、かがり火を焚き、鐘を鳴らして氣勢をあげたという。この猪苗代の周辺は散士ら会津藩士の謹慎場所でもあつた。旧会津藩領での一揆の一部始終を目撃したウィリス（英国公使館付の医官）はつぎのようなことを書き残している。

会津領で私の知識と観察に入つたすべてのことから、私に強いられる印象はつぎのことであつた。すなわち、武士

階級は、正常の比率をはるかに越えていること、この階級は抑圧的でかつ腐敗していること、これまで会津の支配によつて孤立無援の隷属状態におかれていた農民階級が、会津の支配にたいして抱いている、いやでたまらぬ感情から引起こされたこと、である。会津の医師たちは、領主は、農民一揆を耳にしていたく心を痛めた、すべての会津の役人は、一揆を藩の過去の政治へのもつとも鋭い非難と思っている、と私に話した。私は、もし会津藩主と家老たちが恩赦を受けても、彼らをふたたびその旧領地の人民に押しつけるのは不可能であろう、と知識のある日本人がいうのを聞いた。

一揆の群が焚くかがり火のゆらめきと彼らのときの声を散士がどのような思いで見聞きしていたかは知るよしもない。が、想像を逞しくするなら、一揆の群の打ちこわしの音は、散士の「三百年來養成セシ士風」の誇りを打ちこわす音のように聞こえたのではないだろうか。「仮令政府ガ其ノ権限ヲ越工人民ノ權利自由ヲ剝奪シ賦歛課税ヲ重クシ殘虐至ラザル所ナキノ日ニ逢フト席旗竹槍ノ暴挙ヲナスハ甚ダ不可ナリ」という散士の発言の裏には、そのような謹慎所時代の世直し一揆に対する記憶が見え隠れしているように思われる。

明治二年、会津藩の關係者全員が東京に護送される。まもなく免罪の（詔勅）と移封の（恩命）が下され、散士一家も新領地斗南藩へ移る（明治三年）。この時散士は、東京に居のこり勉学の道を求めるが、なかなか前途はひらけず各地を転々し斗

南藩の新住居にたち寄つたりする。そのころ斗南藩での散士一家の生活はどうであったか、弟の五郎はかたる。

はばかり申せば、この様はお家復興にあらず、恩典にもあらず、まこと流罪にほかならず。拳藩流罪という史上かつてなき極刑にあらざるか。

父も兄も姉も、ただひたすらに縄ないて語ることなし。余少年なりとはいえ、これほどの仕打ちに遭いて正邪の分別つかぬはずなし。かかる運命ならば（略）母上さまともにも他界せばよかりしものをと、甲斐なきことを思いつつ炬の火を見つめてあれば、若松城下を波打ちて狂う紅蓮の炎、眼底に揺らめき白装束の母上さまの自害の遺骸その中に伏してあり。熱涙頬を伝いて流る。（略）過去もなく未来もなくただ寒く飢えたる現在のみに生くること、いかに辛きことなりしか、あすの死を待ちて今日を生くるは、かえつて楽ならん（略）今は救いの死をさえ得る能わず、「やれやれ会津の乞食藩士ども下北に餓死して絶えたるよと薩長の下郎武士どもに笑われるぞ、生き抜け、生きて残れ、会津の国辱雪ぐまでは生きてあれよ、ここはまだ戰場なるぞ」と、父に厳しく叱責され、嘔吐を催しつつ犬肉の塩煮を飲みこみたること忘れず。

この恐ろしいほど悲惨な生活を散士も一時ながら体験している「幽囚數歳俗吏ニ罵ラレ獄卒ニ辱メラレ後又北極ノ荒野ニ放謫セラレ悲風蕭殺牧馬夜嘶キ飢テ山下ニ蕨薇ヲ掘リ」（卷二）云々と記している。生きることの難しさ、それはこの時代、散士に

かぎらず勝者も敗者もなく、士族と呼ばれたほとんどすべての者が直面し肌身に感じていたものであろう。²⁶しかし、散士のように敗者としてこの時代をむかえた者にとつて、それは人一倍骨にしみるものがあつたと想像される。生きること生きぬくことが難しくなればなるほど、彼らは敗者としてのおのれの運命を自覚せざるを得なかつたであろう。その一人の山路愛山（幕臣の子として明治時代を迎えた）は、後年「命耶罪耶」という文章の中で、つぎのように証言する。

正直に曰へば予は「九州男児」等の名詞が余が耳朶に触るる毎に一種の悲感を生ぜざる能はず。（略）彼等が各其所に生れたるは彼等の功にも罪にもあらざる也。而して九州男児は戦勝者の子として、たとへば戦勝者ならざるも、猶立派なる士族の子として、家に資あり、外に推挽する人あり。自ら運命を開くことに於て十分の便宜を有するも。徳川武士の子は戦敗者の子にして追放人の境界に投げられる者なり。内に資なし、外に援なし。彼等は孤立独行空拳にして起たざるを得ず。余は此所に於て人生の両面を見るなり。²⁷

さらに愛山は「人生の両面」について具体的に語りきかせる。

余は「軽蔑せられたる静岡人士」の境遇に身を置きたるが故に頗る敗者の運命を会得せり。頼む木陰に雨の漏る、悲境に身を置きたるが故に戦勝者の子の味はざる味を嘗めたり。独り余のみならず「抜間の旗本八万騎」と罵られたる徳川武士の子は皆此味を嘗めたり。是れ実に熊の膽より

は苦き味なり。敗軍の将の子は先天的に無能者なるが如く思ふ世間に於て空拳を振つて起ちし我儕は如何ばかりかの苦痛を要せしぞ。彼等に伴ひ彼等を励ます者は一片の志のみ。而して世は無法なる論理を以て彼等を遇せんとするなり。曰く彼等は品性なき徒なり、何となれば其父兄は戦に敗れたる者なれば。曰く彼等は詐欺する者なり、何となれば其父兄は謀叛人なれば。同情とは勝ちたる者が勝ちたる者に与ふる心のみ。敗たる者は誹謗せらるゝのみ。冷笑せらるゝのみ。²⁸

散士が「余ハ自作人物（セルフ、メイトマン）ならんのみ²⁹」と自己規定したとき、愛山の味わつた「敗者の運命」は散士のたどつてきた道ともかなり重なつてくるように思われる。しかし、散士は、父親や愛山のように薩長に対する怨念をあまり表にはださなかつた。西南戦争がおこつたとき、彼は「送友人西征」という文章を「東京日日新聞」（明治十年三月九日）に寄せている。

薩州ハ（略）兵威ヲ以テ朝廷ヲ劫サント欲スルモノナリ（略）旧時ノ如ク压制人民ヲ束縛セント欲スルモノナリ之レ天下ノ逆賊ナリ人民自由ノ公敵ナリ今若シ彼等ヲシテ一旦廟堂ノ上ニ立タシメハ日本ハ土崩瓦解外人ノ羈束ヲ受ケ天地ニ落チ亦タ白日ヲ見ル能ハザルハ明鏡ニ照スヨリ猶ホ明也（略）天下人心漸ク浮薄ニ趣キ報國ノ志氣消滅スルモ東奥男児心胆未ダ全ク腐ラザルヲ喜ブ行矣行矣東奥男児ヨ（略）余亦タ不日京ヲ発セントス（略）行矣行矣東奥男

散士のこの激励文は、いかにも文明開化的な色合いにそまっています、どこかの民権論者が書いたものであるかのようにである。「旧時ノ如ク圧制人民を束縛セント欲スル」「人民自由ノ公敵」への敵愾心とともに「席旗竹槍」への嫌悪感をももちあわせているのがこの民権論者の特徴であろう。が、いずれにせよ、「行矣行矣東奥男兒ヨ」の繰り返しがやや不気味ではあるが、この文章で戊辰戦争の怨みを仄めかすようなところはどこにもない。しかし、「今日薩人に一矢を放たざれば、地下にたいし面目なしと考え、いよいよ本日西征軍に従うため出發す」と、弟に書いてよこした散士の手紙をよめば、敗者として薩長への怨念から彼も自由でなかったことが裏付けられよう。「行矣行矣東奥男兒ヨ」の繰り返しは、おそらくこの手紙の前後にあってもっとも相応しいように思われる。「この封建士族の偏狭な憎悪にアナクロニズムのレッテルを貼ることはやさしい。しかし、東海散士もこのような薩長への暗い怨念を共有することで結束していた一種の運命共同体に属していたわけで、この屈辱にみちた体験と不条理な情念こそ歴史の意味を問いなおすかけがえない原点にちがひなかった」とは、前田愛の「明治歴史文学の原像」(『展望』昭和五十一年九月)での卓見だが、まさにそのとおりであろう。「屈辱にみちた体験と不条理な情念」さらに「国家ト共ニ亡フル者」としてのひたすらな忠誠心こそ「亡国ノ遺臣」東海散士を規定するものであり、『佳人之奇遇』という壮大な物語をうみだす源泉であったと言えよう。

散士と朝鮮の亡命客金玉均との面会場面にたち帰ってみよう。たしかに「僕モ亦亡国敗残ノ餘なり」という散士の挨拶の言葉は誤解の余地があった。しかし、あなたの国も亡びましたね、と言うつもりで散士が言い出したのではないことは明らかであろう。おそらく金玉均も散士の言いたいことは明らかであろう。が、散士の言葉をすなおに受け止めてやるには、日本と係わり深い、朝鮮の一亡命客として金玉均の心境はあまりにも複雑であったであろうと推察される。いずれにせよ、散士が「亡国ノ遺臣」といったのは、私もあなたのように敗者の運命を味わいながらも挫けず「国家ト共ニ亡フル者」であります、と志を同じくする者としての理解を示したまでである。そしてまさにその意味での「亡国ノ遺臣」の合言葉のもとに散士をはじめ幽蘭・紅蓮・范卿らは結集していたのである。彼らにとって敗者とは、それぞれの運命における負目ではなく、かえって正統性を立証するあかしであり、その意味での敗者を自覚することこそ「佳人之奇遇」という小説世界に生きる人間像の原点であった。

〔注〕

(1) 『政治小説集』日本現代文学全集3 (講談社、昭和四十年) 三九七頁。

(2) 『東海散士詳伝』(「絵入自由新聞」明治二十年九月二十

五日)によると、散士の直談として「余ハ十四歳」だったという。おそらく彼は満年齢で歳を言ったものとおもわれる。二木慶「東海散士年譜」『政治小説集』日本現代文学全集3(四一四頁)にしたがつて数え歳にすると、十六才になる。

(3)「東海散士詳伝」は、「兄と共に京都に至る會々慶応三年の変あり当時散士ハ未だ成童に至らず且多病にして身の丈けも亦短少に他の同年輩と比すべくものあらざりしに腰に両刀を帯び肩に小銃を負ひ手に長槍を揮つて陣中にあり敵来らば衝きとめんと語り居たりしは可笑かしくも亦けなげなりしと当時のことを見し人今に語り合へり」と証言する。また、星野正介「亡国の遺臣——東海散士・柴四郎伝」(会津会報)昭和四十七年十二月、二十四頁)は、「邸の門前で、十才なる五男の五郎が遊んでいると、異様な風態の男がやって来て、なつかし気に笑いかけた。よく見ると、京都へ行っていた兄の茂四郎(四郎の幼名)であった。「ざんぎり」頭で、赤毛布を着ていた。どちらも当時の最新流行のスタイルであった」と伝えている。

(4)『島崎藤村集(二)』日本現代文学全集20(講談社、昭和三十八年)二六一頁。

(5)王政復古から十一日まへの慶応三年十一月二十八日、松平慶永が会津藩士手代木直右衛門をよんで、大政奉還について会津藩の意見をたずねたとき、手代木は「政権を朝廷に帰すのはごもっとも至極のことと存じますが、幕府までお捨てになつてはおさまりがつきましますまい。公議といつてもどのような運び

になるのか、ちつとも見通しがありません。議事院と申しても、外国の制度どおりにはなかなか急に運営されるとも存じられません。人材の挙用ということも立派ではありませんが、どんな人材が出ましても、事務の処理になれていなくては、急場の用には立ちましません。こうしたことは、幕府の役人でなくてはとも行き届きましますまい。また朝廷とても人材がなく、なかなか王政復古など思いもよらないことです。あれこれ考え合わせますと、幕府の制度に頼るほかには、国家をうまく治めていく見込みはないと存じます」(『春獄私記』復古記、東大出版会。引用は、石井孝「戊辰戦争論」吉川弘文館、昭和五十九年、一七一頁による)と答えたと言う。とはいっても、大政奉還後の政治形態において王政復古がまったく予想外の出来事だったとは言えないだろう。が、そのばあいでも、幕府の指導的地位は依然と保証されるべきものであり、またそうなるであろう、と会津藩は期待し予想していたように考えられる。手代木勝任・柴太一郎(述)「松平容保公伝」『会津藩庁記録』日本史籍協会叢書1(日本史籍協会編(東大出版会、大正十五年、昭和四十四年復刻、五二一―二頁)は、「慶喜公カ政権返上ノ勸告ヲ納レ(略)如何ニモ百事公平ノ御処置ノ成ル事ト確定シテ居リマシタ然ルニ十二月九日ノ御変事タルヤ(略)五六ノ大藩ヲシテ俄然兵力ヲ以テ禁闕ヲ固メシメ総裁議定参与ノ三職ヲ置キ撰閣幕府ヲ初メ旧制ハ総テ廃止セラレタルカ維新手始めノ変革テ有リマシタ慶喜公カ天下国家ノ為メ二十数代世襲ノ政権ヲ返上セラレマシタハ如何ニモ忠君愛國ノ至情公平ナル成サレ方ト存シマス左スレ

ハ朝廷ニテモ御優待アルヘキ筈ナルニ左ハナクシテ右ニ申ス通
リ五六大藩ノ兵力ヲ以テ改革スルハ是レ即チ疑ヲ以テ待ツト云
フ者テ（略）然レハ薩州等恐レナカラ幼沖ノ主上ヲ擁シ奉リ私
意ヲ逞ウスルニ相違ナイ依テ彼等君側ノ悪ヲ弘ヒ除キ公平無私
ノ政体ノ立ツ様ニ力ヲ尽スカ国家ニ忠ナル所ノ本分ヲト会津藩
ニテハ確信致シタ訳テ御坐リマス」、と会津藩の思惑に反する
事態の推移を書き留めている。

（6）佐々木克『戊辰戦争』（中公新書、昭和五十二年、平成
五年 十九版、二五頁）によれば、鳥羽伏見の初戦において、
「山内容堂がこの戦争は幕府および会・桑二藩と薩長との私闘
であるとして、藩兵が戦闘に参加するのを禁じたため、土佐藩
兵はほとんど実戦に参加しなかつた」と言う。

（7）このことを聞きただすため仙台藩では藩主伊達慶邦の名
で、太政官あてに建白書を送るつもりだったという。佐々木克
『戊辰戦争』（七〇頁）は、その建白書のおもな内容を要約し
て、つぎのようにまとめている。「鳥羽・伏見合戦で、会津・
桑名軍が官軍へ先に発砲した事が朝敵の理由であるというが、
徳川家の布告によると、薩摩勢の発砲にやむをえず応戦したと
いっている。（略）発砲の前後が判然としないのは、人心の疑
惑を深めている。「ペリー来航以来の失政の責任をとって、徳
川家が政権を返上したが、その後は一体なんの企みがあって、
朝廷に背いたというのであろうか。「王政復古の新政がなされ
ようとしているのに、いままた兵を動かし、万民を水火の苦に
落しおれようとするのは、幼帝の聖慮から出たものではあるま

い。「長州藩は先年宮廷に発砲（禁門の変）し、朝敵の汚名を
こうむったが、一時の過誤ということで寛大の処置がとられた
先例がある。慶喜を単に発砲の先後をもって、叛賊と定めては、
諸藩はもちろん下々まで承服しまし。」

（8）『東海散士詳伝』では、「散士ハ衆と共に天神口より進撃
して暫く戦ひて退きぬ病後の疲れ思ふに堪へたり其後城中に籠
りて戦闘にも関せざりしが」云々、と散士が籠城組に加わって
いたことを証言する。石光真人編著『ある明治人の記録』（中
公新書、昭和四十六年、平成二年 二七版、四二頁）も、「茂
四郎兄（略）熱病のため臥床してたてず、祖母、母に激励され
無理に城中に赴かざる。これがため白虎隊に編入せられながら、
やむなく城中にて病臥し、城外の白虎隊ほとんど全滅せるも兄
生き残れる次第なり」と言う。ところが、村上兵衛『守城の人』
（光人社、平成四年、八七頁）によると、散士は「難を避けた
商家に一日潜伏し、翌日の夕刻、降人として西軍の陣営に出掛
け、捕虜として収容された」という。籠城戦はおろか散士みず
から捕虜になるため出向いていったというから、これは散士に
たいする、従来イメージをはなはだしく損ないかねない話で
ある。「佳人之奇遇」では、籠城したともしなかつたとも語ら
ずに処理している。しかし、この小説を取り扱うにあたって問
題は、散士が籠城したか否かということにあるのではない。よ
り重要なのは、彼が会津藩という武士共同体の一員として理不
尽な戦争にまきこまれ、すべてを失ったうえ、堪えたい屈辱
を味わいながらも、なおかつ武士としての誇りを自覚し堅持し

続けたということであろう。

(9) 散士の仲兄謙介の死についての詳しいことは、中村兵衛『守城の人』(四五頁)を参照されたい。謙介の死は、作戦中の死であるから戦死にはちがいないが、通りがかりの村の白警組織に見咎められたすえ殺されたのだから「惨死」にひとしかつた。

(10) (11) 石光真人編著『ある明治人の記録』四五頁。

(12) 同 四一頁。

(13) 星野正介「亡国の遺臣——東海散士・柴四朗伝」二七頁。

(14) (15) (16) 会津戊辰戦争史編纂会「会津戊辰戦争史」

(昭和八年)六四六～八頁。

(17) 安政五年(一八五八)長州藩は藩是として、朝廷へは「忠節」、幕府へは「信義」、先祖(藩祖)へは「孝道」という三大綱を定めたそうである(松本三之介「幕末における正統性觀念の存在形態」『明治国家形成過程の研究』稲田正次編、御茶の水書房、昭和五十二年 改装版、六〇七頁)。しかし、倒幕論の登場は、それまでの重層的な忠誠関係を解体し、朝廷への忠誠をもっとも重視するに至ったことを意味する。王政復古の後、明治維新の立役者たちが朝臣として姿を表したことは幕藩体制のもとでの忠誠関係から脱却した超藩的な存在のありかたを象徴的に示すものであった、と考えられる。

(18) このことについて丸山真男「忠誠と叛逆」(筑摩書房、平成四年、三三頁)はつぎのように述べる。「名分論が幕藩体制の名分と王朝の名分とに分裂したただけならまだしも事態は簡

単であった。王朝的名分自体の時々の状況における担い手が、文久二(一八六二)年の坂下門外の変から蛤御門・長州征伐さらに鳥羽・伏見の戦とめまぐるしく変動し逆転する。しかも堂上・親藩・外様それぞれの内部で、多様な忠誠の相剋が激化して互いに逆賊・奸臣のレッテルを投げ合い、情勢の変動とともに、文字通り昨日の逆賊は忠臣に、王師の軍は朝敵に早変わりするのである。こうした忠誠の奪い合いと急転が、上は朝・幕ないしは諸藩という単位から下は文字通り個人の単位まで、あらゆるレヴェルにおいて起こるからには、「勝てば官軍、負ければ賊」という言葉が圧倒的な実感のひびきを伝えなかつたらむしろ不思議だろう」。

(19) 思案橋事件については、伊藤仁太郎『維新秘話』伊藤痴遊全集10(平凡社、昭和四年、四三三～四一頁)と高橋哲夫『明治の士族』(歴史春秋社、昭和五十五年、一九一～二一〇頁)を参照。

(20) たとえば、「山林ノ材木ヲ伐スルハ国家ノ利害ニ関スルノ論」(『東京日日新聞』明治九年十月二十七日)、「東洋美人ノ嘆」(同 十一月二十四日)、「地方人民ノ形状ヲ察ス」(同 明治十年二月五日)など。

(21) ただし、「佳人之奇遇」での散士に反骨精神がまったくないと言うのではない。散士の叛逆や革命の論理が明治政府の転覆をはかるためのものではない、と述べたまでである。では、彼の反骨精神がどこに向けられ何と戦っているのが問題となってくるだろうが、これは「佳人之奇遇」全体にかかわる問題な

ので、別稿にゆずりたい。

(22) 松本健一『第二の維新』（国文社、昭和五十四年）一九頁。

(23) 庄司吉之助『世直し一揆の研究』（校倉書房、昭和四十五年）一三五～一四〇頁。

(24) 石井孝「一外人のみた会津藩の終末」（『日本歴史』昭和三十九年一月）一八頁。

(25) 『ある明治人の記録』七四頁。

(26) 士族の窮乏については、吉川秀造『士族授産の研究』（有斐閣、昭和十年、二八～七八頁）および高橋哲夫『明治の士族』（二五～三四頁）を参照。

(27) 『国民新聞』明治二十八年三月一日。

(28) 同 三月三日。

(29) 『東海散士評伝』。

(30) 『ある明治人の記録』一一六頁。

(31) 『明治の文学』日本文学研究資料叢書（有精堂、昭和五十六年）五一頁。

※『佳人之奇遇』の本文引用は、『政治小説集』日本現代文学全集3（講談社、昭和四十年）によった。引用にあたって、傍点・傍線類はすべて削除し、旧漢字体は適宜、常用漢字に改めた。

（本学大学院博士課程）